

医療ルネサンス

No.6594

遠隔医療

2 / 5

妊婦の遠距離通院減らす

山に囲まれた民話の里・

岩手県遠野市には、15年前から産科医がない。

遠野の妊婦は、車で片道1時間前後かかる盛岡、花巻、北上、釜石、大船渡など県内各市の産科医療機関で出産している。臨月となると妊婦健診の頻度が増え、身重の遠距離通院に負担や不安を感じる妊婦も少なくない。

2014年4月に花巻市の産科クリニックで長男を出産した団体職員B子さん(35)。妊娠中、受診する際は自分で車を運転して行つたが、「大きなおなかで花巻まで往復してくると疲れてしまい、ぐったりしました」という。春先まで雪や路面凍結も気になるので、運転中も神経を使つた。

そんなB子さんのような妊婦の負担軽減に一役買つているのが、岩手県内の産科医療機関約40施設と市町



「赤ちゃんは元気で異常ありませんよ。ピースしてますね」。遠野市で助産師が行う妊婦の超音波検査の画像を、沿岸部の県立大船渡病院の診察室で同時にチェックする小笠原さん

村が参加し、妊婦健診データを共有する周産期医療情報ネットワーク「いーはとーぶ」のシステムだ。

助産師の側も、産科で記入されたカルテを見て経過を確認することができる。

通常、出産までの妊婦健診は十数回行われるが、B子さんは、この仕組みを利用し、うち4回を地元で済ませることができた。「妊娠中は眠くなりやすかったので、運転して受診する回数を減らせたのは助かりました。体力面のつらさや雪の運転の心配を軽くしてもらえた。地元に気軽に相談出来る助産師がいるのも

遠方の産科の主治医もいつでもチェックでき、異常がないか見極める仕組みだ。

小笠原さんはネットワークに先駆け、約10年前から同病院と遠野市の保健センターを回線で結び、遠隔妊婦健診も行ってきた。遠野市で助産師が行う超音波検査の画像を、同時に病院で見てテレビ電話で問診する形だ。こうした妊婦健診を見ることが、遠距離受診の回数を減らせるようにした。

東日本大震災以降、遠野の妊婦が沿岸部の同病院に来て出産する例は減ったものの、それまでの遠隔妊婦健診の経験が今のネットワ

心強かつた」と話す。

この周産期医療情報ネットワークは09年に始まつた。構築に関わった県立大

船渡病院副院長の小笠原敏浩さん(産婦人科)は「岩手県は四国4県と同等の面積だが、近年も産科の減少は著しい。地域により出産を控えた妊婦の遠距離通院は避けられないが、情報通信技術を活用した遠隔チエックで、妊婦の負担やリスクを軽減させたい」と話す。